

「コロナ禍の教育」

一般財団法人脳神経疾患研究所附属 総合南東北病院 診療放射線科 鍵谷 勝(Kagiya Masaru)

【はじめに】

コロナ禍の教育は今までとは大きく環境が変わった中でも、個の技術や知識を向上させなくてはいけないという使命は変わらない。

しかし、通常とは違う運用や職場体制の中で、教育に掛ける時間、特に準備をする側の時間は、手探り状態で進んできたが最近になってようやく形になってきたように感じている。

当院のコロナ禍の患者受け入れ態勢は、隣接する関連病院の一部を外来及び病棟としてコロナ患者及び発熱者対応とした。診療放射線技師は交代制10名にて開始した。

コロナ対応当初から一般診療と新型コロナ患者対応を完全に分けて運用を行った事により、漠然とした不安を抱えずに対応が出来、感染対策の意識も高めることが出来たように思う。

【対応・結果】

- ・教育体制においては、コロナ禍前後で変わりはなく計画及び予算化されて運用している。
- ・院内の必須講習会(感染や医療安全)においては参加・状況管理が可能なWeb講習会とした。
- ・部門勉強会などは、一部会場とWebを組み合わせて院内配信勉強会とした。
- ・参加自由型のクラウド配信の情報提供。
- ・キャリアパスなど病院全体での教育体制が確立されている。

予定外の学会や研究会、セミナーなどは予算の中で臨機応変に変更することが可能となっている。

実際Webによる学会、研究会が多くなったことにより参加人数も増えたことや今まで参加出来ていない学会なども参加しやすくなったこともあり変更による予算施行も多くなった。

今後のWebによる学会や研究会は、今後改良されより扱いやすいものになると考える。教育の機会を増やすことも出来る良いツールであると考えます。

【考察】

Webによる学会や研究会は移動による時間制約がなくなったことで、予算内での参加人数も増やす事が出来た。さらに無料の研究会なども増えより多くの教育の機会を得ることが出来た。

今まで参加できなかった会にも積極的に参加できるようになったことで、自己研鑽を希望する人とならない人の間には、かなりの差が生まれてくるように思う。

今、戸惑っているシステム的なことはすぐにも解消され、あたかも現地にいるようなやり取りができることを考えれば、改めてWebは良い仕組みではないかと思えます。

コロナ禍とはいえ、教育の機会は失われることはなく、かえって教育を受ける機会が増えたと実感できた。